

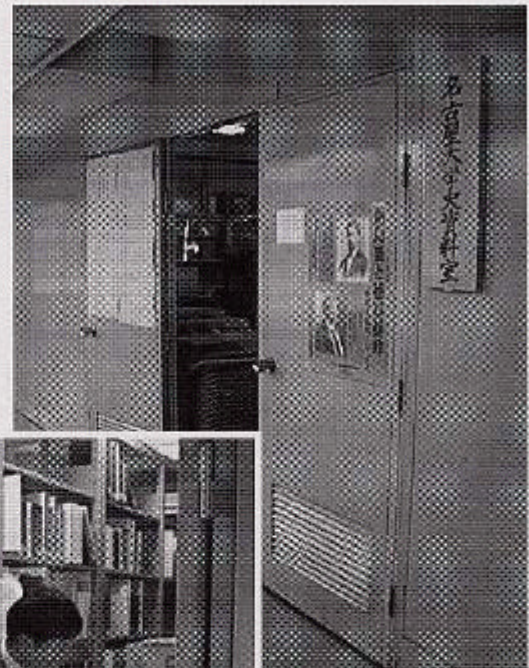
名古屋大学史資料室ニュース

<http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/>

第4号

目次

| | |
|---------------------|---|
| 時代の残す資料と資料の語る時代 | 2 |
| 資料の整理・保存・活用 | |
| 一名大法学部保管の民事判決原本について | 3 |
| 名古屋大学史資料室の利用について | 5 |
| 資料室保存資料目録について | 6 |
| 受贈図書一覧 | 7 |
| 資料室日誌(抄) | 9 |



名古屋大学本部2号館3階の名古屋大学史資料室

時代の残す資料と 資料の語る時代

名古屋大学副総長 森 正 夫

1990年代は日本の大学の歴史に関わる資料についての画期の一つとなるのではないか。最近、このような感想を抱いている。

もとより、1954年大学に入学して以来、たまたま国立大学で過ごしてきた私自身のささやかな体験に照らしても、ほかにも特徴をもつ時期はいくつも存在した。たとえば、1967年以降、70年代の初頭に至るいわゆる学園紛争の時期は、その紛争に関わった大学関係の諸機関・諸団体・諸個人やこれを外側から論評するジャーナリズム・評論家からおびただしい言説が、著作・記録をはじめとするさまざまな形態をとって、あるいは運動の媒体として配布され、あるいは広く社会一般の読者を求めて出版された。『名古屋大学五十年史』・「部局史」「通史」各章の叙述はこうした資料を活用することなくしては十分なものとはならなかったであろう。

このおびただしさには及ばぬとはいえ、それに先立つこと10年前、60年安保の時代にも同様の状況が見られた。40代になってもまだ大切に自身の筐底に蔵していた樺美智子さんを追悼する『人知れず微笑まん』（三一書房）もその一つである。この書はデモの隊列の中で夭折した樺さんの個人の精神史に関する記録にとどまらず、東京大学文学部国史研究室における教育の歴史、東京の大学における学生運動の歴史に関わる貴重な記録でもある。この年、京都大学では、大学院生協議会という名称の自治会がはじめて大学院生自身の手による実態調査を行い、『大学院白書』を刊行した。この大学の院生であった自分もその作成に動員された一人であるが、そこには単に経済生活にとどまらず、当時の京都大学の研究室における教官と院生との教育関係の動態が院生の立場から提示されていた。

1990年代の大学がその内部で作成してきた多種多様な文書資料は、70年前後、あるいは60年前後のそれとは異なる。作成の主体は、多くが大学管理機関における議を経て設立された全学的委員会、あるいは部局の委員会であり、発行主体は全学あるいは部局レベルの大学管理機関である。周知のように、90年代は、いわゆる「大学改革」の時代であった。70年代にすでに兆し、80年代中に顕在化していた教養部学生と一般教育との乖離の傾向をどう克服するかという課題を解決すべく、本学をはじめとするいくつかの大学では教養部の改廃という組織改変が模索され、文部省は大学審議会を通じ、一般教育と専門教育の固定区分の廃止—いわゆる大綱化を通じて解

決を目指し、両者一体となってさまざまな改革が進行した。本学では教養部改革第三次検討委員会、同専門委員会がまず活動し、続いて四年一貫教育委員会、その下での四年一貫教育計画委員会、共通教育実施運営委員会、さらに計画委員会の専門委員会や部



会が活発に動いた。国際開発研究科をはじめとする独立研究科の新設、理工系部局における大学院重点化を基軸とする大学院での既存の教育・研究システムにおける改革も併行して進み、関係研究科単独、あるいは数研究科共同の委員会組織がこれを支えた。また、文部省が全学あるいは各部局の改革を促進するため、自己点検評価及び第三者評価を促したこともあり、全学及び各部局でのための委員会も編成された。こうした「新生事物」としての多くの委員会の編纂になる、これまでに例をみない数の夥しい文書が刊行されるようになったのである。

『名古屋大学における教育改革（四年一貫教育を目指して）』（教養部改革第三次検討委員会専門委員会。平成5年2月）にはじまる学部四年一貫教育関係のものだけでも、『1994 SYLLABUS 全学共通科目授業要覧』以来の毎年度のシラバス、毎年度の『全学共通教育授業アンケート調査報告書』にはじまり、この3月末に出される平成9年度の『名古屋大学における四年一貫教育計画委員会の活動の現状と今後の課題』及び『全学共通教育レビュー委員会の報告書』に至るまで10数冊に達する。これらは全学共通教育関連の刊行物のみを挙げたにすぎない。全学自己点検評価委員会が1992-93年度以来、計3次にわたって刊行してきた『明日を拓く名古屋大学』をはじめ、各学部の自己点検評価、外部評価の報告書も数多い。

大学が自ら活動の報告を作成し、公刊する、すなわち大学が説明責任をとりはじめた1990年代は、後代の大学史編纂にとっても、資料の豊かさと体系性という点において、非常に扱いやすい時代となるであろう。しかしこうして整然と整理された公式刊行物の山は他方で歴史認識に一面性を与えるかもしれない。その意味で、後代の歴史家は、一方では、こうした時代についてこそ、定量分析を可能にする統計資料群や機関の残しておいた内部文書など、客観的検討を可能にする資料の類を、他方では、関係者個人による私的なメモやエッセイを活用する

資料の整理・保存・活用

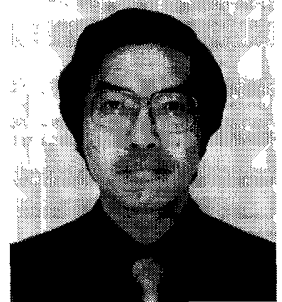
—名大法学部保管の民事判決原本について—

法学部が現在保管している資料に、明治初年から昭和18年までの民事判決原本（裁判の判決書）がある。この資料は、しかるべき恒久的保存利用機関に再移管されるまで一時的に保管しているものであって、その意味では必ずしも名古屋大学所蔵資料ということではなく、また内容的にも民事裁判の記録であるから、大学史に直接かわるものはほとんどないのであるが、貴重資料の整理・保存・活用のあり方ということについて大学史資料室の業務や問題関心とも共通するところが多少はあるかも知れないので、この欄を借りて紹介させていただくこととしたい。

最高裁は、判決確定後50年以上経過した民事判決原本を平成6年1月から順次廃棄処分することを一旦決定したが、学界・法曹界などから再考を求める要望が強く出されたのを受けてこれを撤回し、とりあえず緊急避難的な措置として全国8か所の高裁所在地及びその近辺の国立10大学（北大・東北大・東大・名大・阪大・岡山大・広島大・香川大・九大・熊本大）で分散保管することとなった。この間の経緯については新聞やテレビ等で何度か取り上げられ、名大に搬入されたことについても『中日新聞』紙上に大きく報じられたから（平成7年10月1日付朝刊県内版）、記憶されている方も少なくないであろう。

名大法学部に移管されたのは、名古屋高裁管内30の裁判所が保存していた判決原本のうち、平成5年12月までに確定後50年を経過することとなった昭和18年末までの分で、「ゆうバック」の段ボール箱502個に詰めて搬入された。判決原本は、1件について数枚ないし数十枚のものであるが、これを半年分、1年分などの単位で綴じて簿冊にしてあり、冊数にして2800冊余、書架に並べると約180メートル、90センチ書架で200段分になる（ちなみに今回

神保文夫



10大学に移管された分全体では約2200メートル）。法学部の建物にこれだけの分量のものを収納する余裕はまったくないため、旧古川図書館（現年代測定資料研究センターの建物）の保存書庫の一部を借りて、ゆうバックの箱詰めのまま置くこととした。他大学では会議室や教官研究室の空き部屋を転用して保管場所に宛てているところもあり、また保管中に万一事故でもあれば取り返しがつかないから、保管場所にセンサーを設置したり窓に鉄格子をつけるなどの防犯措置を講じた大学もある。幸い名大の場合は本来書庫として作られた場所で、現在は通常施錠されていて人の出入りも少なく、資料管理学の専門家にも視察してもらったが、保存環境という点で見ると比較的良好であるといえる。

10大学では、受け入れた判決原本の劣化状態等を調査するとともに、簿冊ごとに保管番号を付与して将来の利用に備えることとし、名大でも平成8年から9年にかけてこれを実施したが、この作業の過程で確認できた最古の判決は、明治7年1月12日岐阜県庁の「村高分合出入」であった。当時はまだ司法権の独立ということがなく、地方官庁たる県も裁判権を行使していたのであり、「出入」ということばも江戸時代の裁判用語である。また冒頭に大きく「天皇ノ名ニ於テ」と朱書きし、菊の紋章とともに印刷した罫紙を使用しているものを見かけたが、これは大日本帝国憲法施行直後のきわめて短い期間だけ用いられたもので、同57条1項に「司法権ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ」とあるのに基づいていること

ことによって公式資料の間隙を埋める努力を払う必要があるように思う。たとえば、いまなお緊張を孕んでいる学部的全学共通科目の部局別担当科目や部局別担当コマ数の認識についての真実を伝えるよすがはそうした資料になるであろう。たとえば、私の手元にある平成4年（1992）当時の一件のメモでは、教育改革の過程で新たに創設された情報文化学部の助手を除くポスト数の中で、49.2%が同学部固有の専門教育に関する科目担当のものであり、約50.8%が全学共通教育に関わる科目担当のものであることが、本学と文部省関係当局との間で確認されている。全学共通科目部局別担当コマ数については、当

該メモのこうした記載内容を前掲の『名古屋大学における教育改革（四年一貫教育を目指して）』などと照合することによって真実に近づくことができよう。もとより、私的なメモなどの領域においては、果たして誰が真実に貫かれた文章をしたため得るのか、あるいは、誰が当該の文章の真実性を見抜き得るのか、といった永遠の難問（アポリア）がある。これらの難問の解決は、あるいはすべて歴史を司るクリオの神に委ねられねばならないかもしれない。

（文学部教授）

はいうまでもない。このように判決原本を通して、明治以後西洋近代法を取り入れつつ法や裁判が近代化していく過程を具体的に検証することが可能であり、伝統法と近代法の対抗、代言人・弁護士の活動、法慣行や人々の権利意識・法観念など、多様な観点からの研究が期待される。また法制史・法律学だけでなく、社会史・世相史・家族史・地方史などさまざまな分野の資料としても大いに活用することができるであろう。日本近代史の研究にとって第一級の資料であることは間違いない。

このように研究資料として限らない利用価値をもつ判決原本であるが、もとよりこれは私的紛争の記録であって、通常の図書資料等とは性格の異なる特殊な資料である。ある裁判の関係者だった人が、判決原本が廃棄になると聞いて喜んだのもつかの間、一転して大学で保管されることとなったのを知り、がっかりしたという話がある。当事者にしてみれば、「裁判沙汰」にかかわったことじたい他人に知られたくない事柄である場合もあるのである。50年経過したといっても、ほとんど同時代に近い資料であり、たとえ学術研究目的の利用であってもその取り扱いにはとくに慎重な配慮が払われなければならない。10大学に京大を加えた11大学の法学部長が連絡会議を組織して、判決原本の保管にかかわる諸問題を協議し

ているが、保管中に閲覧利用に供することが可能な場合を想定して、当事者のプライバシー保護に充分留意した供覧方法等につき同連絡会議としてのガイドラインを作ったのはそのためである。

しかしながら名大の場合、前述のように箱詰めのまま保管しているのが精一杯という現状では、研究のための活用どころか閲覧の希望に応じることすら事実上不可能であるため、研究者や自治体史の編集室などから時おり問い合わせを受けることもあるが、当面はすべて謝絶を余儀なくされている。また10大学に保管中の判決原本を順次データベース化する計画もあり、既に国際日本文化研究センターによって一部着手されているものの、これには莫大な費用が見込まれる上に、相当の時間も要することと思われる。

本来、判決原本だけでなく訴状・答弁書など各種の訴訟記録を含む司法資料全般について、国が責任をもって体系的に収集・整理・保存し活用するための体制を整えるべきであることは誰が考えても明らかであろうし、諸外国ではそれがあたりまえでもある。多方面の理解と支援を得ることにより、そのような体制が一日も早く実現することを希ってやまない。

(法学部教授)

『名古屋大学史紀要』原稿募集

名古屋大学史資料室が毎年刊行する『名古屋大学史紀要』は、下記要領の趣旨にかなうものであれば、執筆者の所属等にかかわらず投稿を受け付けています。

1999年3月刊行の第7号の執筆申し込みは7月末日、原稿提出は10月末日締め切りを予定しています。詳細については、お気軽に大学史資料室までお問い合わせ下さい。

名古屋大学史紀要編集要領

- 1 本誌は、名古屋大学史および高等教育史に関わる研究論文、研究ノート、史資料紹介等を掲載する。
- 2 本誌に論文等を掲載しようとする者は、所定の投稿要領に従い編集事務局に送付するものとする。なお投稿者については学内外を問わない。

- 3 原稿の掲載は編集委員会の審議を経て決定する。
- 4 掲載予定の原稿について編集委員会は、執筆者との協議を通じて内容の修正・変更を求めることがある。
- 5 編集事務局は、名古屋大学史資料室におく。

名古屋大学史紀要投稿要領

- 1 論文原稿は原則として未発表のものに限る。
- 2 投稿の内容に従って、編集委員会が原稿の分量を指定することがある。
- 3 原稿は英文タイトルを付けて送付するものとする。
- 4 原稿は、氏名、所属（職名その他を含む）、連絡先を付記し編集事務局に送付するものとする。

名古屋大学史資料室の利用について

本ニュース前号、前々号で紹介した名古屋大学史資料室利用規程が、1997年10月21日開催の評議会で承認され、同日付けで制定施行されました。これをうけて、資料室では学内外者に対する正式なサービスを行っています。

制定施行された利用規程では、既報のとおり、資料室が所蔵・保管する資料を原則として公開することが明示されています。これにより、利用者は、個人の秘密保持等の理由あるいは寄贈・寄託条件により、利用制限が行われるもの以外はすべての資料を利用することができます。

利用者が実際に利用できる資料は、『名古屋大学史資料室保存資料仮目録（1997年11月1日現在）』（詳細は後述）

に掲載されています。現時点では、「仮目録」となっていますが、資料室では今後も継続して未整理状態にある所蔵・保管資料の整理作業を行い、適宜、目録掲載資料数を充実させる予定です。

現在、資料室では、<http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp>でWWWページを公開していますが、将来的には目録掲載データをこのWWWページ上でも公開し、インターネット利用による簡易検索が行えるようにすることを検討しています。

以下に、資料室の利用について簡単に紹介しておきます。なお、利用方法等の詳細については、別途、利用案内を作成しましたので、希望者は資料室へ請求してください。

1 利用全体について

○利用できる日時

- ・月曜日～金曜日の午前10時～正午および午後1時～午後4時30分。
- ただし、祝・休日、名古屋大学記念日（5月1日）、年末年始（12月28日～1月3日）は利用できません。
- ・なお、利用できる日時が都合により変更される場合がありますので、来室の際には事前に開室日時をご確認ください。

○利用できる方

- ・名古屋大学の職員・学生（研究生・聴講生等を含む）
- ・名古屋大学の元職員・卒業者
- ・学術に関する調査・研究を行う方で所属機関の長または図書館長等の紹介がある方
- ・その他、資料室長が許可した方

○利用できるサービス

- ・資料の閲覧
- ・資料の複写（撮影）
- ・資料の貸出
- ・参考調査等

2 資料の閲覧について

○閲覧希望者は、所定の「閲覧申込書」に必要事項を記入の上、提出してください。その際、本人であることを確認できるもの（所属機関等が発行する身分証明書・運転免許証・保険証・紹介状等）を提示していただきます。

○閲覧できる資料は、目録に掲載されています。

3 資料の複写（撮影）について

○複写（撮影）は、書籍・雑誌等への掲載に必要な場合に限り許可されます。

○複写（撮影）希望者は、所定の「複写（撮影）申請書」に必要事項を記入の上、提出してください。なお、必要に応じて関係資料の提出を求める場合があります。

○複写（撮影）できる資料は、目録に掲載されています。

4 資料の貸出について

○貸出は、公共的目的を有した展示会等に必要な場合に限り許可されます。

○貸出希望者は、所定の「貸出申請書」に必要事項を記入の上、提出してください。なお、必要に応じて関係資料の提出を求める場合があります。

○貸出できる資料は、目録に掲載されています。

5 参考調査等について

○参考調査等として、資料の検索、特定事項に関する調査または参考文献等の紹介などを依頼することができます。

○文書または電話・FAX等によって参考調査等を依頼することもできます。

6 その他

○その他、資料の利用等について不明な点があれば、資料室までお問い合わせください。

資料室保存資料目録について

1 資料点数について

資料整理に着手してから約1年半で、編集室から受け継いだ資料等について5425点の整理を終えた。このうち、コピー資料等による同一重複資料、および寄贈・寄託条件により利用制限が行われた資料などを除いた、4191点を目録に掲載した。ただし、たとえば綴・ファイル資料の場合、全体の資料名は付けたが、その中の1点ごとの文書名がまだ付けていない場合が多くあるなど、今後再整理の必要がある。

2 掲載項目について

「資料名」「作成・差出」「発行・受取」「年月日」「形態・数量」「備考」「整理番号（枝番）」の7項目を掲載した。

- ・ **資料名**…資料に名称が付いている場合は、その名称を記載した。資料に名称が付いていない場合は、整理者が適宜名称を付け（ ）書きにした。また、コピー等の補足説明についても、（ ）書きで記載した。
- ・ **作成・差出**…書籍は、著者や編者等を作成者とした。また、作成と差出が異なる場合は、その資料ごとに適宜判断し、より重要と思われる方を記載した。
- ・ **発行・受取**…書籍で、発行者と発行所が併記されている場合は、発行所を記載した。なお、「著者」「編者」「発行」等の肩書がない場合は、作成・差出の項目に記載し、発行・受取は空欄にした。また、受取は本来発行とは別項目にしなければならないが、現在のところ受取を記載しなければならない資料が少ないので、紙面の有効利用を考え、同一項目にした。なお、本項目が受取となる場合は【受】と頭書した。
- ・ **年月日**…書籍の場合、発行・印刷、初版・再版、一刷・二刷等多様な日付があるが、印刷日は除いた上で、一番新しい日付を記載した。写などの資料で、写した日付が不明の場合は、原資料の日付を記載した。判明する場合は、写した日付を記載し、原資料の日付は、補足説明として資料名の項目に（ ）書きで記載した。な

お、年月日は西暦に換算した8桁数字で表記した。

- ・ **形態・数量**…書籍・綴・ファイル等の資料は「冊」、文書・絵図・ポスター・新聞・パンフレットのよう冊子形態になっていない資料は「部」、その他絵はがき・レコード等の資料は「点」とした。数量は、1資料を1冊（部）として数えることを基本とし、2冊（部）以上をまとめて記載することはなるべく避けた。また、写やコピーについては、数量の後に「写」と付記した。
- ・ **備考**…旧編集室時代の整理番号、綴やファイル、分類重複資料の配架場所（後述）、他部局等からの借用中の資料などについての説明を記載した。
- ・ **整理番号（枝番）**…基本は1点1整理番号であるが、一括資料等については枝番をつけた。詳しくは「大学史資料の『整理番号』について」（『名古屋大学史紀要第5号』）を参照していただきたい。

3 分類について

名古屋大学に関する資料については、時期により「名古屋大学前身諸学校」「名古屋帝国大学・旧制名古屋大学」「新制名古屋大学」の3つに大分類した。これは、『名古屋大学五十年史』の通史編の記載に沿うように考えたためであり、必ずしも最善の分類とはいえない。たとえば、一資料で前身校の時期から新制名古屋大学の時期まで該当する場合は、3つの大分類すべてに重複記載しなければならない（なおこの場合、実際の資料がどこの分類に配架されているかは、備考欄に「 」書きで記載した）。時期区分をせずに部局ごと、すなわち『年史』の部局史編に沿うように分類することも考えられる。これを考慮し、医学部の個人資料や医学史関係等は新制名古屋大学の医学部の分類に一括記載するなど、一部の資料については時期区分にこだわらず、一分類に一括記載した場合もある。

また、名古屋大学以外の資料については、「他大学」「高等教育史（戦前までの高等教育）」「高等教育（戦後の高等教育）」「教育行政（戦後の教育行政の内高等教育に関するものを除いた資料）」「教育史（教育関係資料の内前三者を除いた資料）」「文書館・博物館等」「地方（特に東海三県に関する資料）」「その他」の8つに大分類した。これについても「高等教育史」と「高等教育」との間などに分類重複がある。なお、以上11大分類それぞれにつ

いて、さらに中分類・小分類の二段階の分類をした。

4 印刷目録とPC (パソコン) 検索

PC検索の場合は、上記3の分類のほか、種類検索とキーワード検索を付加した。前者は一覧・便覧・概要・写真集・報告書等、資料のもつ属性によって検索でき、後者は法規関係・財政関係・大学設置関係・留学生等、3の分類以外に必要と思えるキーワードで検索できる。時期や大学や学部に関係なく一括検索でき、前述の分類の弱点を多少でもカバーできたのではと思っている。

印刷目録の刊行も考えてはいるが、編集室時代からの

資料さえもまだすべて整理ができていない現段階では保留し、差し替え可能な仮目録を室に置いた。なお、図書館等ではカードや目録を新たには作成せず、利便性からPC検索のみが主流になりつつある。しかし、閲覧は所与の分類やキーワードによって資料を絞り込むだけが方法ではない。全資料を閲覧した上で、閲覧者独自の考えから資料を絞り込む方法もあり、これは研究方法としても非常に重要である。PCが扱えない人のためにという理由からだけでなく、このような意味からも、全資料が閲覧できるカードや印刷目録は、いつの時代においても必要と考える。

(神谷 智)

受贈図書一覧 (97年3月～98年2月)

| | | | |
|---------------------|-------|-------------------------|-------|
| 井上円了研究 第7号 | | 日本女子大学史資料集 第三 | |
| 東洋大学井上円了記念学術センター | 3月10日 | 日本女子大学成瀬記念館 | 5月2日 |
| 新島研究 第88号 同志社社史資料室 | 3月10日 | 成瀬記念館1996 No. 12 | |
| 桃山学院年史紀要 第十六号 | | 日本女子大学成瀬記念館 | 5月2日 |
| 桃山学院年史委員会 | 4月2日 | 愛知県教育史 資料編 現代一 | |
| 歴史編纂事務室報告 第十八集 | | 愛知県教育センター | 5月2日 |
| 明治大学総務部歴史編纂事務室 | 4月8日 | 神奈川大学史資料集 第十三集 | |
| 大学史紀要 紫紺の歷程 創刊号1997 | | 神奈川大学大学資料編纂室 | 5月9日 |
| 明治大学総務部歴史編纂事務室 | 4月8日 | 九州大学関係史料仮目録 | |
| 聖徳学園女子短期大学紀要 第28集 | | 九州大学大学史料室 | 5月19日 |
| 聖徳学園女子短期大学 | 4月8日 | 他大学等関係史料仮目録 | |
| 立命館百年史紀要 第五号 | | 九州大学大学史料室 | 5月19日 |
| 立命館百年史編纂室 | 4月10日 | 文部省等諸団体関係史料仮目録 | |
| 同志社談叢 第17号 同志社社史資料室 | 4月15日 | 九州大学大学史料室 | 5月19日 |
| 新島襄のアメリカ時代 同志社社史資料室 | 4月15日 | 人文論集 第32巻 第2号 | |
| 中央大学史資料集 第十五集 | | 神戸商科大学経済研究所 | 5月26日 |
| 中央大学広報部大学史編纂課 | 4月15日 | 人文論集 第32巻 第3号 | |
| 中央大学史紀要 第八号 | | 神戸商科大学経済研究所 | 5月26日 |
| 中央大学広報部大学史編纂課 | 4月15日 | 東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻 | |
| 中央大学百年史編集ニュース 第二十七号 | | 東京芸術大学 | 5月26日 |
| 中央大学広報部大学史編纂課 | 4月15日 | 東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻別巻 | |
| 藤沢市文書館紀要 第二十号 | | 東京芸術大学 | 5月26日 |
| 藤沢市文書館 | 4月17日 | 高田短期大学紀要 第15号 | |
| サティア《あるがまま》第26号 | | 高田短期大学図書館 | 5月29日 |
| 東洋大学井上円了記念学術センター | 4月23日 | 大谷大学真宗総合研究所研究紀要 第14号 | |
| 九州大学大学史料叢書 第5輯 | | 1995(平成7)年度研究報告 | |
| 九州大学大学史料室 | 4月28日 | 大谷大学真宗総合研究所 | 6月1日 |
| 九州大学大学史料室所蔵写真目録 | | 関西学院百年史 通史編I | |
| 一 九州帝国大学時代 一 | | 関西学院学院史資料室 | 6月9日 |
| 九州大学大学史料室 | 4月28日 | | |

| | | | |
|--|--------|---|--------|
| 復刻本内科彙講神経系統編完 高橋 昭 | 6月13日 | 新島襄と徳富蘇峰 — 蘇峰永眠40年記念 — 同志社社史資料室 | 11月17日 |
| 関西大学年史紀要 第九号 関西大学事業局出版部 出版課年史資料編集室 | 6月23日 | 愛媛大学学報 No. 410 愛媛大学50年史編集室 | 11月27日 |
| 名古屋外国語大学外国語学部紀要 第15号 名古屋外国語大学附属図書館 | 6月30日 | 国士館80年の歩み 国士館資料室 | 12月 1日 |
| 新修名古屋市史 第1巻 名古屋市市政資料館新修 名古屋市史編さん事務局 | 7月16日 | 愛知学院百二十年誌 学校法人愛知学院学院長小出忠孝 | 12月 1日 |
| 新修名古屋市史 第1巻別冊 名古屋市市政資料館新修 名古屋市史編さん事務局 | 7月16日 | いわき明星大学十年の歩み いわき明星大学 | 12月 9日 |
| 新修名古屋市史 第8巻自然編 名古屋市市政資料館新修 名古屋市史編さん事務局 | 7月16日 | 京都大学百年史 部局史編1・2・3 京都大学 | 12月 9日 |
| 井上円了センター年報 第6号 東洋大学井上円了記念学術センター | 7月25日 | 愛媛大学学報 No. 411 愛媛大学50年史編集室 | 12月18日 |
| サティア《あるがまま》第27号 東洋大学井上円了記念学術センター | 7月25日 | 長野大学三十年誌 学校法人長野学園 | 12月22日 |
| 平成9年度 三重大学概要 酒井 一 | 7月31日 | 愛知大学五十年史 資料編 愛知大学五十年史編纂事務局 | 1月 5日 |
| 東京大学史紀要 第十五号 東京大学史史料室 | 8月 4日 | 日本大学百年史 第一巻 日本大学 | 1月 5日 |
| 人文論集 第32巻 第4号 神戸商科大学経済研究所 | 8月18日 | 日本大学史紀要 創刊号 日本大学 | 1月 5日 |
| 名古屋外国語大学外国語学部紀要 第16号 名古屋外国語大学外国語学部 | 9月22日 | 日本大学史紀要 第2号 日本大学 | 1月 5日 |
| 聖徳学園女子短期大学紀要 第29集 聖徳学園女子短期大学図書館 | 10月 1日 | 日本大学史紀要 第3号 日本大学 | 1月 5日 |
| 中央大学百年史編集ニュース 第二十八号 中央大学広報部大学史編纂課 | 10月 7日 | 京大広報号外創立百周年記念 「京都大学の百年」総集編 京都大学百年史編集史料室 | 1月14日 |
| 早稲田大学百年史 全五巻 早稲田大学大学史編集所 | 10月17日 | 会員名簿 平成九年 創立75周年 第31号 青陵会 (旧制福岡高校同窓会) | 1月22日 |
| 早稲田大学百年史 総索引・年表 早稲田大学大学史編集所 | 10月17日 | 京都大学百年史写真集 京都大学附属図書館百年史編集史料室 | 1月22日 |
| 早稲田大学史記要 第二十九巻 早稲田大学大学史編集所 | 10月17日 | サティア《あるがまま》第29号 東洋大学井上円了記念学術センター | 1月26日 |
| 年譜 1877→1977→1997 東京大学創立120周年記念 東京大学史史料室 | 11月 6日 | 愛媛大学学報 No. 412 愛媛大学50年史編集室 | 1月26日 |
| 東京大学創立120周年記念 東京大学展 — 学問の過去・現在・未来 東京大学史史料室 | 11月 6日 | 東京大学歴代総長式辞告辞集 東京大学史史料室 | 1月29日 |
| サティア《あるがまま》第28号 東洋大学井上円了記念学術センター | 11月 6日 | 東京大学の学徒動員・学徒出陣 東京大学史史料室 | 1月29日 |
| | | 自律處行福原学園50周年記念誌 福原学園 | 2月12日 |
| | | 成瀬記念館1997 No. 13 日本女子大学成瀬記念館 | 2月20日 |
| | | 桃山学院年史紀要 第十七号 桃山学院年史委員会 | 2月20日 |
| | | 扶桑町史上・下、付図 扶桑町教育委員会 | 2月27日 |

資料室日誌（抄）

- 9月16日 南山大学教員2名、南山大学五十年史編纂に関する調査のため来室。名大法学部事務員より、第八高等学校校章につき照会。
- 9月18日 名大総務部総務課事務員、第八高等学校につき照会のため来室。
- 9月19日 名大法学部事務員、第八高等学校につき照会のため来室。
- 9月22日 第一学習社より、第八高等学校の写真につき照会。名大教育学部教員より、小樽商科大学史につき照会。
- 9月24日 森副総長、第八高等学校につき照会のため来室。
- 9月25日 韓国民団本部より、第八高等学校における在日朝鮮人韓国人の学徒出陣につき照会。
- 9月30日 『名古屋大学史資料室ニュース』第3号、刊行。
- 10月3日 名古屋大学史常任資料委員会（第8回）開催。
- 10月10日 中村助手、福岡市出張（教育史学会第41回大会、九州大学大学史料室、13日まで）。
- 10月13日 神谷助手、山口助手、仙台市出張（全国大学史資料協議会1997年度総会、全国研究会、15日まで）。
- 10月21日 『名古屋大学史資料室利用規程』制定・施行。
- 10月27日 名大施設部施設計画推進室員、名古屋帝国大学に関する新聞記事につき照会のため来室。
- 10月28日 岐阜高等専門学校より、第八高等学校校友会誌につき照会。名大中央図書館事務員より、第八高等学校校友会雑誌につき照会。
- 10月31日 名古屋大学史資料室WWWページ正式公開。
- 11月7日 三重大学50周年記念誌編纂室より、『名古屋大学五十年史』の発行部数等につき照会。名大施設部施設計画推進室員、名古屋帝国大学開学式につき照会のため来室。
- 11月14日 名古屋大学史常任資料委員会（第9回）開催。
- 11月18日 名大施設部施設計画推進室員、名古屋帝国大学につき照会のため来室。名大大学務部入試課事務員、『名古屋大学五十年史・通史』につき照会のため来室。元岐阜大学教員より、第八高等学校交友会誌につき照会。
- 12月2日 名大情報文化学部教員より、『名古屋大学五十年史・部局史』の刊行年につき照会。
- 12月8日 名大文学部教員、文学部五十年史写真集作成のための写真所在調査のため来室。
- 12月12日 名大工学部学生、資料閲覧のため来室。
- 12月15日 金沢大学五十年史編纂室員、金沢大学五十年史編纂に関する調査のため来室。
- 12月16日 名大工学部学生、資料閲覧のため来室。
- 12月17日 名古屋大学史常任資料委員会（第10回）開催。早稲田大学大学史編集所員より、史料の保管方法等につき照会。
- 12月22日 名大大学院教育学研究科学生、資料閲覧のため来室。
- 12月24、25日 名古屋大学史資料室の配架替え作業。
- 1月 9日 名大教育学部事務員、資料閲覧のため来室。
- 1月12日 名古屋大学史資料委員会（第6回）開催。名大施設部施設計画推進室員、資料閲覧のため来室。
- 1月22日 名大文学部教員より、停年退職教官関係資料につき照会。
- 1月26日 平成9年度名大停年退職教官に、資料寄贈依頼の文書送付。
- 2月 3日 名大総務部国際交流課事務員、名大同窓会名簿につき照会のため来室。
- 2月 4日 名大大学務部共通教育室事務員より、『名古屋大学五十年史・部局史』につき照会。
- 2月 9日 中日新聞編集委員より、汪兆銘につき照会。
- 2月23日 名大工学部学生、資料閲覧のため来室。
- 2月24日 名大施設部施設計画推進室員、資料閲覧のため来室。
- 2月25日 椙山女学園大学教員、資料閲覧のため来室。

Nagoya University Archives

Nagoya University Archives(NUA) was founded in April 1996, as a inside measure in Nagoya University. NUA has its origins in the Office of the Compilation of the History of Nagoya University established in April 1985, which edited "Fifty Years History of Nagoya University". The publication was planned as one of commemorative works for 50th anniversary of Nagoya University.

NUA collects and archives all kinds of historical materials on Nagoya University. Its purpose is not only the collecting of the above materials, but the research on the history of Nagoya University, moreover that of higher education. NUA's holdings are institutional records, University or other publications, oral history collections, drawings, photographs, memorabilia collections, manuscripts, faculty papers and so on. NUA provides information and records created by, for, and about the University to faculty, staff, students, and the public for research.

The office consists of several teaching staffs of School of Education and School of Letters.

| | | |
|-----------|----|-----------|
| 名古屋大学史資料室 | | |
| 室長 | 篠田 | 弘 (教授・併任) |
| 専任室員 | 神谷 | 智 (助手) |
| | 中村 | 治人 (助手) |
| | 山口 | 拓史 (助手) |
| 事務員 | 増田 | よしみ |

題字 加藤延夫総長

名古屋大学史資料室ニュース 第4号
Nagoya University Archives News No.4

発行日 1998年3月30日 (年2回刊)

編集行 名古屋大学史資料室

名古屋市千種区不老町〒464-8601
電話(052)789-2046・2048

印刷 株式会社荒川印刷

名古屋市中区千代田2-16-38